

## 活動記録

### ①ひょうご歴史研究室の設置目的

ひょうご歴史研究室（以下、研究室と略す）は、平成二七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は149頁に掲載）。

### ②研究室メンバー

研究室メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の学芸員、資料館の職員、県内市町の文化財担当者、大学教員、民間団体研究者などに、参与・顧問・研究員などとして協力を仰いでなりたっている。

今年度の研究室の班と構成メンバーの特徴は、以下の通りである。

第一に、研究室の中心となる非常勤職員は、研究コーディネーター（坂江渉）と県政推進員（長澤喜史）の二名で構成された。

第二に、全体方針等を討議するコア会議メンバーは、昨年度と同じく、藪田貴室長と市村高子次長のもと、合わせて一人名でなりたち、二度の会議を開催した。

第三に、たたら製鉄研究班は、昨年度末に解散したが、秋の特別展「ひょうご鉄ものがたり」と連動して研究を継続し、令和六年一〇月五日付けで、ひょうご歴史研究室編『ひょうご鉄学いまむかし』（神戸新聞総合出版センター）という市民向けブックレットを刊行した。刊行に向けて、合わせて二五回のオンライン研究会を開き検討を重ねた（監修者は村上泰樹・土佐雅彦・坂江渉の三名）。

第四に、「大阪湾岸と淡路の地域史研究班」は、昨年度と同じく一三

名でなりたち、県教委事務局の大本朋弥主査が補佐役となった。

第五に、令和五年度の四月から開始した第Ⅱ期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトでは、昨年度のメンバーに加え、新たに徳島県立博物館の磯本宏紀と松永友和の両学芸員が加わり、総勢一人名になった。

そのほか本プロジェクトには、山下史朗・兵庫県企画部地域振興課歴史資源活用専門官がオブザーバーとして、また福永明子・臨時職員が、収集した諸資料の整理と編集作業に従事した。

このように本年度の研究室の人員には若干の変動がみられたが、全体として三三名で構成されている（重複を除く）。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の柏原正民課長で、そのもとに二名の文化財課職員（服部寛副課長兼文化財班長、大本朋弥主査）が、各班の補佐役を

担当した（148頁の「構成メンバー一覧」を参照）。

### ③ 研究方針

開設初年度の平成二七年（二〇一五）、研究の基本方針を討議するコア会議、全体会の開催を経て、研究室の当面の研究テーマを、

#### I 『播磨国風土記』

#### II 赤松氏と山城

#### III たたら製鉄、

の三つにすることが決められた。それを遂行するため、三つの研究班が編成された。

ただしこのうち『播磨国風土記』研究班は、令和三年度末に解散し、翌年度から「大阪湾岸と淡路の地域史研究班」（以下、大阪湾岸班と略する）がある）を立ち上げ、また前述のように「赤松氏と山城研究班」は令和四年度末に解散した。

研究室では平成三〇（二〇一八）年度から研究の全体方針を掲げている。本年度は、「九年間の研究成果

を踏まえ、基礎研究を継続するとともに、島根県古代文化センターと淡路島日本遺産委員会との連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展を図る」と決めた。

### ④ 本年度の活動概略

本年度も厳しい財政事情により、以前のような活動を順調にすすめることができなかった。

第一に、各班のフィールド調査活動を抑えざるを得なかった。現地調査と資料調査の概要は、147頁の一覧を参照していただきたい。

第二に、研究室の連携組織である淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの対面による合同事業を実施できなかった。

このうち淡路島日本遺産委員会との共催行事、「ひょうご歴史研究室 in 淡路島・淡路島日本遺産海人の調査研究事業」については開催せず、代わりに「令和六年度ひょうご歴史文化フォーラム」を、令和六年

一月三〇日（土）、兵庫県立兵庫津ミュージアム研修室にて開いた。テーマは「古代の海人の地域間交流と倭王権——大阪湾岸・熊野灘・志摩半島——」として、合わせて一二六名が参加した。



第三に、コア会議・大阪湾岸班の研究会・第Ⅱ期「鳴門の渦潮」調査

研究プロジェクトの合同研究会のすべては、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式でおこなった。このうちコア会議と大阪湾岸班

の研究会の対面会場は当館会議室にて、第Ⅱ期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの合同研究会の対面会場は、洲本市立淡路文化史料館会議室（令和六年五月二五日）と、徳島県鳴門市うずしお会館・第二会議室（九月二十八日～二十九日）であった。このうち多くのご負担をかけた淡路県民局には、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

第四に、合わせて二回開かれたコアメンバー会議（令和六年五月一日と二月七日）では、現況の財政事情も踏まえ、研究室の今後をどうするかについて討議した。

このうち二月七日の第二回コアメンバー会議では、柏原正民文化財課長から、一〇年続いた研究室の活動は、今年度をもって解散すること

が告げられた。

これ対して参加者からは、次のような意見が出された。

・「解散するのは誠に残念。研究室で収集した史料や成果物は、市町レベルの地域主体のシステムを作っていく必要があると思う」。

・「旧たたら製鉄研究班の活動のなかで、これまで非常に多くの文献資料、古文書などの撮影をおこなっている。また『研究室紀要』やホームページも充実させて来た。今後それらの成果を博物館できちんと継承できる体制を作っていただきたい」。

・「いきなり今年度で解散となるとは想像もしていなかった。もう少し違う形のソフトウェアリングもあるのではないか」。

・「研究室の一〇年間は、自分としても、とても充実した内容になったと感じている。しかし「予算事業」としての限界もあるのも確か

で、また研究コーディネーターの年齢もそれ相応に達しており、一つの「区切り」なるのかと思う。

今までの議論であったように、今後館内で研究室成果の継承に向けての制度設計をきちんと立てたいと思う」。

これを受けてちようど一〇年間存続してきたひょうご歴史研究室は、令和七年三月末日に閉室することになった。

以下、大阪湾岸班と第Ⅱ期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの研究活動と成果を概略的に紹介する。

なお各班の研究会と調査活動、および「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの調査・研究活動内容については、147頁の一覧表を参照のこと（本誌第八号に掲載できなかった昨年度の分も含む）。

## 一、大阪湾岸と淡路の地域史研究班

### (1) 研究方針

令和六年六月一五日の第一回研究会で、昨年度と同じく、「これまで淡路島日本遺産委員会との連携成果を踏まえ、前近代の大阪湾岸、淡路島の地域史研究に取組む。その成果を地域資源を活かしたまちづくり事業に反映させる。また『播磨国風土記』研究の成果の普及をめざす」という研究方針を決めた。

具体的には、①島根県古代文化センターと連携して、海人の南北間交流や比較生業論の研究、②第II期「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトとの協働、③江戸時代の「淡路国分間絵図」と「淡路名所図会」の積極的分析をすすめる、このうち『淡路名所図会』については、来年度以降にデジタルデータベース化と公開をめざす、④『播磨国風土記』研究の成果の普及、⑤博物館の主催行事、令和

六年度ひょうご歴史文化フォーラムの開催支援、という五つの内容をすすめることにした。本年度の研究成果は、以下のとおりである。

### (2) 研究成果の公表

①『播磨国風土記』の古代史』の英訳論文の作成とホームページの立ち上げ

『播磨国風土記』の研究成果の情報発信の一環として、ひょうご歴史研究室編の『播磨国風土記』の古代史』（神戸新聞総合出版センター、二〇二一年）の内容を英訳したものを、令和五年度末に、研究室のホームページ上にアップすることができた。翻訳にあたったのは、本誌第八号にも紹介した、海外における『播磨国風土記』研究の第一人者、ニュージーランド在住の日本文学研究者、エドウィーナ・パーマー氏である。二年ほど前に、パーマー氏から、『播磨国風土記』の古代史』の各論

文などの英訳に協力したいという、ありがたい申し出があった。研究室

兵庫県立歴史博物館  
HIROSHIMA MUSEUM OF HISTORY AND CULTURE

利用案内 アクセス 展示・展覧会 もよおし コレクション 読む・観る

英語版・『播磨国風土記』の古代史  
*Ancient Japan through Harima no Kuni Fudoki*  
Translated by Edwina Palmer

Table of contents / 目次

01 To the Reader/ 読者のみなさんへ >	02 Preface/ はじめに >
03 Explanatory Notes/ 凡例と部別マップ >	04 Contents/ 38篇の論文 >
05 Afterword/ あとがき >	06 Bibliographic Notes/ 著者紹介 >

01 To the Reader / 読者のみなさんへ

兵衛 啓

ではこれを受け、準備体制を整え、パーマー氏と各執筆者とのやりとりを経て、合わせて三八篇の英訳論文を公表した。また各論文には、丁寧にもパーマー氏による註釈も付されている。

英訳の労をとっていただいたエドウィーナ・パーマー氏に対し、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

② 『播磨国風土記』の魅力を世界から発信する国際学術シンポジウム「兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室一〇周年記念・科研費調査研究会」の開催

□令和六年一二月一日の午前一一時  
〜午後三時三〇分

□神戸大学大学院人文学研究科・学生ホールにて

□参加費無料

□主催

・兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史

研究室

・科学研究費・基盤研究（C）「現地調査を踏まえた「利他行」の思想と地方寺院の立地場所に関する共同研究」（24K04183。研究代表者：坂江渉）

□共催

・神戸大学大学院人文学研究科  
・岡山大学文明動態学研究所

□報告と討論

・坂江渉

「歴史学からみたパーマー氏の口承文芸論―『播磨国風土記』研究の新潮流―」

・アンデス・カールキビスト（岩手大学国際教育センター准教授）  
『播磨国風土記』の英訳、

Michiko Y. Aoki & Edwina Palmer

―佐比岡を中心に―

・ポール・ブラザートン（神戸大学大学院人文学研究科大学院生）

「パーマー氏による英語版『播磨国風土記』の古代史」と周辺国の

古代史について」

・エドウィーナ・パーマー（元ニュージールランド国立ウエリントン大学のビクトリア大学日本語学科助教授）  
「リプライコメント」



□概略

ひょうご歴史研究室の開設一〇周年を記念して、神戸大学とそこに研究拠点を置く科学研究費調査チー

ム、および岡山大学文明動態学研究所と連携して、ニュージールランド在住の日本文学研究者、エドウィーナ・パーマー氏の『播磨国風土記』研究成果を素材にした国際学術シンポジウムを開催した。

坂江報告では、ひょうご歴史研究室編の『『播磨国風土記』の古代史』についてのパーマー氏による英語翻訳の労に感謝を述べた。そのうえで『播磨国風土記』に関するパーマー氏の研究成果を五つ指摘。また残された二つの課題を述べた。またアンガス・カールキビスト氏（岩手大学准教授）は、パーマー氏の著書での、揖保郡佐比丘条の翻訳の仕方の問題点を指摘した。ポール・ブラザートン氏（神戸大学大学院生）は、パーマー氏の翻訳が日本古代史研究を国際化させる役割を果たすと述べたうえで、播磨国と隣国との地域間交流研究の可能性を提起した。

パーマー氏のリプライコメントの

後の総合討論では、『風土記』の地名起源説話や地域神話が口頭で語られた場所の問題、古代の渡来人による口頭伝承の痕跡をどう見いだすかの点、『風土記』研究成果を世界に向けて発信することの歴史的意義などが議論された。

当日の参加者からは、

- ・「翻訳、『風土記』の研究成果の発信、世界的な学術交流という意味で、大変貴重な機会だったと存じます。近年、日本では風土記の注釈書をはじめ基礎的な研究の成果が、続々と刊行されており、それらをさらに取り込み、海外の研究者の方々と共有、研究してゆく機運がさらに高まっていくこと、自身の課題としても受け止めていきたいと存じます」。

- ・「シンポジウムには、スウェーデン人・デンマーク人・英国人・イタリア人・在米中東系アメリカ人まで参加され、『播磨国風土記』

が国際的に脚光を浴びるようになって感じた」。

- ・『播磨国風土記』を通して、国や言語を越えて、世界中の人びとの間で交流とやりとりがされていた点に驚いた。オンラインを通じた研究交流の可能性と、『風土記』研究の世界的な広がりを確認できる場となった」。

- ・「今回の集まりは、英語圏の研究者との間の国際交流の場になってきたが、今後は東アジアの漢字文化圏の研究者との共同研究に期待したい」、などの感想や要望が出された。

このように、この企画を通じて、さまざまな国で『風土記』が読まれ、また研究が広がっていることがわかり、今後このような取り組みをさらに展開させることの重要性を知ることができた。

参加者は五五名（対面一九名、オンライン三六名）。海外からは、イ

タリア・ナポリ東洋大学のアントニオ・マニエーリ氏、バージニア大学のハルーン・ファルーキ氏、またデンマーク出身の大阪大学留学生・アデルセン・エミル氏など多彩な面々となった。

### ③「令和六年度ひょうご歴史文化フォーラム」の開催協力

□令和六年一月三〇日（土曜日）  
□テーマ「古代の海人の地域間交流と倭王権」大阪湾岸・熊野灘・志摩半島」

□兵庫県立兵庫津ミュージアム研修室

□参加費無料

□主催

・兵庫県立歴史博物館、同ひょうご歴史研究室

・兵庫県立兵庫津ミュージアム

□共催

・兵庫県立考古博物館

□講演・コメント

・古市晃客員研究員

「大阪湾岸の海人と遠洋航海」  
神武東征伝承を中心に」

・中村弘研究員

「古墳からみた海人の地域間交流」  
九州・播磨・志摩」

・多賀茂治研究員

「古墳時代の塩作りからみた大阪湾岸の地域間交流」

・菱田哲郎兵庫県立考古博物館長

「古代の海人の地域間交流と倭王権に寄せて」

ひょうご歴史文化フォーラムは、兵庫県民の研究交流の場として、毎年博物館が主催する行事として開かれ、ひょうご歴史研究室がそれを支援している。

これまで平成二九年（二〇一七）に上郡町で、平成三〇年（二〇一八）に宍粟市山崎町で、平成三一年（二〇一九）に姫路文学館講堂で、令和四年（二〇二二）に県立西播磨文化会館で、令和六年（二〇二四）

に淡路市で開き、今年度分とを合わせて六回開いたことになる（コロナ禍の時期は開催そのものを断念した）。

討論では会場からの質問用紙（計一八通）を交えながら、①古代の海人は一般の民と区別して、どのように位置づけられる存在なのか（その定義）、②古代の海洋ネットワークのあり方は、一本の線で結ばれる広域的なものだったのか、あるいは地域間をつなぐ「分節的」なものだったのか、③各時代の倭王権と海人の関係をどう見るか、とくに権力編成のあり方などの問題を中心にパネルディスカッションを組み立てた。

このうち最も議論になった①に関して、大阪湾岸などで作られた塩の消費については、民間需要のほか、王権による馬の飼育・育成にもとづく需要があり、五世紀以降の朝鮮半島への出兵の動きと密接不可分の関

係にあるのではないか、という意見が出された。

回収したアンケート結果によると、今回のフォーラムは、「動く海人」「石棺を運ぶ海人」「塩を作る海人」など、古代の海人の多様性理解が深まった、とてもわかりやすい討論だった等の意見が出された。ひょうご歴史研究室が支援する最後の「ひょうご歴史文化フォーラム」を飾るに相応しい集いになった。

#### ④本誌への論文執筆

本特集号のすべての論文は、大阪湾岸班の研究成果を総括したものでなりたっている。大阪湾岸班には他のメンバーもいるが、それらの成果は、鳴門の渦潮調査研究プロジェクト実行委員会編『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観』（令和七年度二月刊）に収められている。このうち竹内研究員による「史料紹介」論文は、基本的にそれを再掲載したも

のである。

#### 二、旧「たたら製鉄研究班」 ―ブックレットの刊行―

昨年度末に解散した「たたら製鉄班」では、令和五年度の方針として、「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめる」とともに、その成果にもとづき、令和六年度開催の特別展「ひょうご鉄ものがたり」と連携し、「たたら製鉄入門解説書」（図録副読本）の刊行をめざす」を掲げていた。

それを受け旧メンバーである村上泰樹・土佐雅彦・永恵裕和・大村拓生・笠井今日子・加納亜由子・田路正幸・藤田淳・坂江渉の九名、および特別展の担当者の鈴木敬二学芸員らが約一年半の間、オンライン形式の共同研究会を重ね、特別展の開催日の令和六年一〇月五日に刊行させたのが、ひょうご歴史研究室編の

ブックレット、『ひょうご鉄学いまむかし―播磨のたたら製鉄―』（神戸新聞総合出版センター。全八〇頁、本体価格二二〇〇円）である。



ブックレットは、第一部「鉄づくりの始まり」、第二部「播磨のたたら製鉄」、第三部「製鉄の現在」の



三部でなりたち、合わせて二九篇の読み切り論文で構成されている。

内容については、「専門性と読みやすさが両立されている」「見開きでテーマごとに記述されており、読みやすい本になっている」と思いますが、兵庫のたたら製鉄については、これまでは認知度はあまり高くなかったと思いますが、この本と開催中の展覧会を契機に高まるものと思います「ジブリ映画の「もののけ姫」によって、「たたら」というと出雲をイメージしますが、ブックレットによりそれが壊れました。近畿地方にありながら、これまでよくわからなかった兵庫の産業を詳しく知ることができました」「ブックレットについては、たたら製鉄研究班の「区切り」となる「入門書」の刊行を館長からかなり前から要請されており、とても辛い作業でもあったが、今は一つの達成感がある」などの意見や感想が寄せられた。

### 三、第Ⅱ期「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト(二〇二二～二〇二四年度)

第Ⅰ期プロジェクトの『鳴門の渦潮』と淡路島の文化遺産を受け、二年間の予定で始まったのがこのプロジェクトである。研究テーマを「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観」として、徳島藩が作成した淡路国の村毎の「分間絵図」や「淡路名所図会」などの絵画資料を十分に活かすことをめざした。

#### (1) 報告書の刊行

昨年度から合わせて六回の合同研究会と個別調査をおこない、その成果を令和七年二月末日、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会編『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観』と題する報告書として刊行する予定である。論文の執筆者は、一一名の調査委員と関西学院大学文

学研究科大学院研究員の吉田隼人氏、福永明子臨時職員で、全一六〇頁程度で五〇〇冊刊行し、関係者に配布する予定である(本書の目次構成については145頁を参照のこと)。

#### (2) 関連資料の調査・撮影

昨年度から、資料として用いる淡路島の「分間絵図」、および館蔵資料の「淡路名所図会」について、業者による一括撮影を実施し、それらの写真データを収集・保管することができた。このうち淡路三市が保管する「分間絵図」については、それぞれの担当部局の許諾申請をおこなって実施した。

またこれとは別に、沼島漁業協同組合が所蔵する古文書や歴史資料の調査・撮影を合わせて四回実施した。撮影した資料データの整理・保管をめざすとともに、それらの目録を作成し、ホームページ上に公表する予定である。

さらに沼島地区公民館で約五〇年振りに再発見した徳島藩沼島制札資料に関しては、本誌「史料紹介」の竹内信論文に詳しい。



### (3) 研究成果の公表と現地交流会

第Ⅰ期〜Ⅱ期の研究成果について、これまで資料調査でお世話になった沼島島民に公表するために、

令和六年八月六日、沼島総合センターの大集会室で開催した。この行事では、鳴門の渦潮をめぐる漁業慣行や、沼島の生業や生活習俗などに関する聞き取りもめざした（宣伝チラシについては次頁を参照）。

## 四、その他

(1) 地方史研究協議会第七四回兵庫大会への協力

令和六年一〇月一九日（土）〜二〇日（日）、甲南大学岡本キャンパスにて「ひょうご五国の多様性と交流 ―兵庫地域史研究の新たな試み―」というテーマでおこなわれた大会開催に協力した。約一年以上も前から実行委員会が立ち上がり、藪田貫室長が共同代表になり、オンライン会議を通じて準備をすすめた。それを通じて、大会当日初日は藪田室長と大國正美顧問が「公開講演」をおこない、二日目の共通論題研究

発表では、中村弘研究員や吉原大志元研究員が報告した。また坂江渉が総合司会の一人をつとめた。会誌の『地方史研究』の四三〇号と四三一号には、定松佳重共同研究員、金田匡史共同研究員、永恵裕和研究員、竹内信研究員、坂江などが、「問題提起論文」を執筆した。さらに大会会場で開かれたポスターセッションにも参加した（吉原大志学芸員・竹内信研究員が担当）。

(2) 明石市江井ヶ島の延命寺の地蔵菩薩像の共同調査

令和六年六月四日（火）、明石市史編さん委員会と共同して、延命寺の地蔵菩薩像の調査をおこなった。神戸佳文共同研究員と前田徹学芸員の調査にもとづき、地蔵菩薩像が一本作りの平安前期頃の作成だと判明した。この成果は『明石市史』の古代史篇に反映される予定である。

## 五、今後に向けて

前述のように、ひょうご歴史研究室は、本年度三月を以て解散することがきまった。研究室では平成二十七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを開設している。またこれまで収集してきた古文書データ、写真撮影データなども蓄積されている。これらのものを研究室解散後も博物館できちんと継承され、活用されていくための方策をどうするか十分に協議していく予定である。

## 【付記】

第Ⅱ期「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトに関連して（142頁以下参照）、令和七年二月三日～四日、調査委員の木村修二・竹内信・坂江渉の三名が、沼島地区公民館と沼島漁業協同組合を訪れた。

このうち沼島地区公民館では、井

津尾由二氏旧蔵文書を取める段ボール箱一二函を、「永久保存」のシールを貼った中性紙箱六函に移し替え、厳重な保管を依頼した。

また沼島漁業協同組合では、倉庫で新たに見つかった資料を中性紙箱（仮番号⑦⑧⑨）に移し替えた。それとともに第⑧函の資料一五点の写

真撮影をおこなった。しかし残念ながら第⑦函（資料二七点）と第⑨函（木箱を含む資料二七点）の撮影はできなかった。倉庫内に残されている、約二〇の段ボール箱の資料とともに、今後何らかの形で継続調査が望まれるところである。

（以上、文責は坂江渉）

**世界遺産登録をめざす  
「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト・現地交流会**

# -沼島の生業と暮らしを語る-

**2024.8.6[火] 13:00-15:30**

**沼島総合センター 2階  
大集会室にて**

**参加費  
無料**




主催：兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室では、令和2年度（2020）、「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査委員会と連携して、調査研究プロジェクト実行委員会をつくりました。

それ以来、沼島漁協文庫、沼島神社等、沼島八幡神社蔵の資料などにもつぎ、沼島や沼路の文化遺産をめぐる調査研究をすすめてきました。

このたびその研究成果を沼島漁民のみさんに公表するとともに、専門の高業をめぐる漁業慣行や、沼島の生業や生活習俗などに関する聞き取りをめざす交流会を開催いたします。現役の漁師のほか、島の古きの方々、主婦の方々、寺の住僧や神主のみなさまのご参加をお待ちします。お気軽にお越しください。

**第1部 成果発表と質疑応答**

- ・ 磯本宏紀（プロジェクト調査委員・徳島県立博物館学芸員）  
「沼島漁協文庫からみえてきたもの - 漁場と漁民の移動性 -」
- ・ 大村拓生（プロジェクト調査委員、ひょうご歴史研究室客員研究員）  
「歴史文献からみた沼島女郎伝承と靴原氏」

**第2部 聞き取りと交流会**

- ・ 話題：沼島の生業（漁業・農業）、生活習俗（水の確保）、渦潮をめぐる漁業慣行や航路のあり方、漁場、潮の読み方、「託分瀬」について、月齢と生業、島の祭りや信仰、館内の古文書情報、渦潮をめぐる伝説など。

主催：兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室  
 協賛：沼島漁業調査研究プロジェクト実行委員会  
 実行：沼島漁協文庫（2021年）  
 共催：沼島地区公民館、沼島漁業協同組合

# 『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観』

## 目 次

### 巻頭口絵

阿波と鳴門・淡路と鳴門 ー刊行にあたってー	・ ・ ・ ・ ・ 藪田 貫	・ ・ ・ 1
「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの活動状況・調査研究チーム名簿	・ ・ ・ ・ ・	3
目次	・ ・ ・ ・ ・	4

### 本文編

大阪湾岸の海人と遠洋航海 ー神武東征伝承を中心にー	・ ・ ・ ・ ・ 古市 晃	・ ・ ・ 7
古代の白砂青松の浜辺と飼飯の海人 ー「慶野松原」ー	・ ・ ・ ・ ・ 坂江 渉	・ ・ ・ 17
淡路国府について	・ ・ ・ ・ ・ 金田章裕	・ ・ ・ 26
中世淡路の所領単位と八幡宮	・ ・ ・ ・ ・ 大村拓生	・ ・ ・ 33
寄図と匱絵図にみる伊能忠敬の鳴門海峡測量	・ ・ ・ ・ ・ 平井松午	・ ・ ・ 47
分間絵図にみる近世淡路の村落景観 ー三原郡湊里村を事例にー	・ ・ ・ ・ ・ 町田 哲	・ ・ ・ 59
19世紀初頭における淡路島南部の村落景観 ー立川瀬村周辺を事例にー	・ ・ ・ ・ ・ 竹内 信	・ ・ ・ 72
淡路の浦と「名所図会」・「分間絵図」 ー由良・江井浦・湊浦・古津路ー	・ ・ ・ ・ ・ 藪田 貫	・ ・ ・ 87
沼島と徳島藩 ー漁業権と出漁をめぐるー	・ ・ ・ ・ ・ 松永友和	・ ・ ・ 96
分間絵図に保存された景観 ー沼島浦と福良浦ー	・ ・ ・ ・ ・ 木村修二	・ ・ ・ 102
沼島漁場の多層性と漁民の移動性 ー沼島漁協文書からの検討ー	・ ・ ・ ・ ・ 磯本宏紀	・ ・ ・ 115

### 解題編

「淡路国分間絵図」解題	・ ・ ・ ・ ・ 平井松午	・ ・ ・ 129
附 「淡路国分間絵図」所在マップ・一覧表		
「淡路名所図会」解題	・ ・ ・ ・ ・ 藪田 貫・福永明子	・ ・ ・ 138
「沼島漁業協同組合所蔵文書」解題	・ ・ ・ ・ ・ 吉田隼人	・ ・ ・ 141
解題 近世初期徳島藩の沼島制札2点について	・ ・ ・ ・ ・ 竹内 信	・ ・ ・ 144

# ふるさとの歴史講座 神戸校

## 大阪湾岸と淡路の地域史研究

平成27年(2015)、県立歴史博物館内に開設されたひょうご歴史研究室は、これまで淡路島日本遺産委員会や「鳴門海峡の渦潮」世界遺産登録推進協議会と連携して、前近代の大阪湾岸と淡路島をめぐる神話・伝承、海人・水軍、景観や地域間交流などについて研究してきました。この講座ではそれらの成果を、ひょうご歴史研究室に関わる8名の研究者が、文献史学と考古学の立場からお話しします。

【会 場】兵庫県民会館（3階303号室）ほか

【時 間】午後2時から3時30分まで（月曜日）※受付は講座開始30分前から

【年間受講料】一般：14,400円 ※友の会会員：10,400円

※兵庫県立美術館「芸術の館友の会」、兵庫県立歴史博物館友の会会員も対象

### 【日程等】

	実施日 / 会場	講 座 内 容	講 師
①	4月22日(月) 兵庫県民会館3階303号室	『古事記』の国生み神話と「鳴門の渦潮」	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター <b>坂江 涉</b>
②	5月13日(月) 兵庫県民会館3階303号室	弥生時代の鉄器生産遺跡と海の民	ひょうご歴史研究室共同研究員 淡路市教育委員会職員 <b>伊藤 宏幸</b>
③	6月3日(月) 兵庫県民会館3階303号室	弥生時代の大阪湾をめぐる物流の道	ひょうご歴史研究室客員研究員 大阪府立弥生文化博物館館長 <b>禰宮田 佳男</b>
④	7月1日(月) 兵庫県民会館3階303号室	源平合戦と韃越の道	兵庫県立歴史博物館学芸員 <b>前田 徹</b>
⑤	9月2日(月) 兵庫県民会館3階303号室	源平内乱期と中世の海域的世界	ひょうご歴史研究室客員研究員 関西大学非常勤講師 <b>大村 拓生</b>
⑥	10月7日(月) 兵庫県民会館4階404号室	中世淡路島の山城と交通路	ひょうご歴史研究室研究員 兵庫県立考古博物館主査 <b>永恵 裕和</b>
⑦	1月20日(月) 兵庫県民会館4階404号室	海人の地域間交流と倭王権	ひょうご歴史研究室客員研究員 神戸大学教授 <b>古市 晃</b>
⑧	2月17日(月) 兵庫県民会館4階404号室	近世絵図に描かれた明石海峡の景観	ひょうご歴史研究室顧問 神戸新聞社常務取締役 <b>大国 正美</b>

※都合により、日程、会場、講師、内容が変更する場合があります。ご了承ください。

### 【問い合わせ】公益財団法人 兵庫県芸術文化協会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通4-16-3

TEL (078) 321-2002

FAX (078) 321-2139

e-mail: sinkoubu@hyogo-arts.or.jp

令和5年度（承前）～令和6年度  
「ひょうご歴史研究室」現地調査・研究会等一覧（敬称略）

**大阪湾岸と淡路の地域史研究班**

	日付	場所	内容	人数	備考
	2/2(木)	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	展示資料の熟覧調査
①	6/4(火)	現地調査	青柳山延命寺	3	地藏菩薩像の調査

**コア会議**

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	5/11(土)	ハイブリッド形式	令和5年度の活動実績と令和6年度の方針・体制案について	13	
②	12/7(土)	ハイブリッド形式	令和6年度の活動実績と今後の予定等について	13	

**大阪湾岸と淡路の地域史研究班**

	日付	場所	報告等	人数	備考
	2/12 (月・祝)	ハイブリッド形式	・古市 晃「海人の地域間交流と倭王権」 ・大村拓生「源平内乱期と中世の海域的世界」 ・伊藤宏幸「弥生時代の鉄器生産遺跡と海の民」	21	
①	11/3(日)	ハイブリッド形式	・永恵裕和「中世淡路の山城配置と水陸交通」	21	
②	6/15(土)	ハイブリッド形式	・古市 晃「大阪湾岸の海人と遠洋航海」 ・中村 弘「古墳から見た海人の地域間交流」 ・多賀茂治「古墳時代の塩作りから見た大阪湾岸の地域間交流」	20	

**たたら製鉄研究班**

	日付	場所	報告等	人数	備考
	2/3(土)	ハイブリッド形式	・鈴木敬二「特別展「ひょうご鉄ものがたり」の進捗状況について」 ・村上泰樹「副読本の個別原稿案について」 ・永恵裕和	16	

## 令和6年度 ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

(敬称略)

### 【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】 (11名)

室長	巖田 貫	兵庫県立歴史博物館 館長
副室長	市村 高子	兵庫県立歴史博物館 次長
参与	中元 孝迪	播磨学研究所名誉所長、兵庫県立大学特任教授
顧問	山下 史朗	兵庫県企画部地域振興課 歴史資源活用専門官
顧問	大國 正美	神戸新聞社 常務取締役 [7年目から]
研究コーディネーター	坂江 渉	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
共同研究員	大谷 輝彦	姫路市観光経済局姫路城総合管理室 主幹 [2年目から]
協力研究員	村上 泰樹	元兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 次長
研究員	中村 弘	兵庫県立考古博物館 館長補佐兼企画広報課長 [4年目から]
県教委事務局	柏原 正寛	兵庫県教育委員会事務局文化財課 課長
県教委事務局	服部 民寛	兵庫県教育委員会事務局文化財課 副課長兼文化財班長

### 【大阪湾岸と淡路の地域史研究班】 (13名)

◎ 研究コーディネーター	坂江 渉	再掲
客員研究員	古市 晃	神戸大学大学院人文学研究科 教授
客員研究員	禰宜田 佳男	大阪府立弥生文化博物館 館長 [9年目から]
客員研究員	大村 拓生	関西大学 非常勤講師
共同研究員	伊藤 宏幸	淡路市教育委員会社会教育課 [5年目から]
共同研究員	金田 匡史	洲本市教育委員会生涯学習課 文化振興係長兼淡路文化史料館長 [8年目から]
共同研究員	定松 佳重	南あわじ市教育委員会埋蔵文化財調査事務所 主任 [8年目から]
共同研究員	神戸 佳文	元兵庫県立歴史博物館 館長補佐
共同研究員	多賀 茂治	兵庫県立兵庫津ミュージアム 学芸班長 [9年目から]
共同研究員	池田 征弘	兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 調査第2課長 [7年目から]
研究員	永恵 裕和	兵庫県立考古博物館 主査 [2年目から]
研究員	竹内 信	兵庫県立歴史博物館 学芸員 [6年目から]
県教委事務局	大本 朋弥	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主査

県政推進員 長澤 喜史 兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

※ ☆新メンバー、◎リーダー

### 【「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究チーム】

座長	巖田 貫	ひょうご歴史研究室 室長
委員	坂江 渉	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター
委員	古市 晃	ひょうご歴史研究室 客員研究員
委員	大村 拓生	ひょうご歴史研究室 客員研究員
委員	木村 修二	神戸大学大学院人文学研究科 特命講師
委員	平井 松午	徳島大学 名誉教授
委員	町田 哲	鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授
委員	金田 章裕	京都府立京都学・歴史館 館長
委員	磯本 宏紀	徳島県立博物館 学芸員
委員	松永 友和	徳島県立博物館 学芸員
委員	竹内 信	兵庫県立歴史博物館 学芸員
オブザーバー	山下 史朗	兵庫県企画部地域振興課 歴史資源活用専門官

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会

臨時職員	福永 明子	
	吉田 隼人	関西学院大学文学研究科大学院 研究員 (『新三木市史』現代史部会 部会員)

## 「ひょうご歴史研究室」設置要綱

### (設 置)

第1条 兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」（以下「研究室」という。）を置く。

### (場 所)

第2条 研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

### (所掌事務)

第3条 研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

- (1) 兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。
- (2) 調査・研究成果の普及に関すること。
- (3) 調査・研究成果の活用に関すること。
- (4) その他兵庫県の歴史研究に関すること。

### (組 織)

第4条 兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

2 室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

### (庶 務)

第5条 研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

### (補 則)

第6条 この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

### 附 則

この要綱は、平成27年4月1日から施行する。



## 執筆者紹介

- ・藪田 貫（やぶた・ゆたか）  
ひょうご歴史研究室長
  - ・榎冨田佳男（ねぎた・よしお）  
ひょうご歴史研究室客員研究員
  - ・伊藤 宏幸（いとう・ひろゆき）  
ひょうご歴史研究室共同研究員
  - ・多賀 茂治（たが・しげじ）  
ひょうご歴史研究室共同研究員
  - ・永恵 裕和（ながえ・ひろかず）  
ひょうご歴史研究室研究員
  - ・金田 匡史（こんだ・まさし）  
ひょうご歴史研究室共同研究員
  - ・神戸 佳文（かんべ・よしふみ）  
ひょうご歴史研究室共同研究員
  - ・城下 隆広（しろした・たかひろ）  
兵庫県西播磨県民局長
  - ・定松 佳重（さだまつ・よしえ）  
ひょうご歴史研究室共同研究員
  - ・竹内 信（たけうち・まこと）  
ひょうご歴史研究室研究員
- 兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員  
兵庫県立歴史博物館学芸員

## 編集後記

平成二七年（二〇一五）の開設以来、ちようど一〇年間続いた歴史研究室も、遂に本年三月末を以て閉室することになりました。開設当初は、いくつかの戸惑いを感じながらの活動でしたが、途中からは多くの皆様にご支援を得て、順調で楽しい学術研究をできたと感じております。関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。心残りなのは、「国際化」という新たな研究成果を挙げつつある『播磨国風土記』研究、および今年度多くの発見があった「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトが、県の事業としてはここで打ち切られることです。「予算事業」であるが故に仕方のないことですが、今後個人として、これらの研究を持続させていくつもりです。またこれまでの研究室の学術成果や、収集した資料データなどは、ホームページなどを通じて、博物館で継承・活用されていく予定になっております。最終号となった本誌は、第Ⅱ期「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの一環として、本年二月刊の『鳴門の渦潮』と淡路島の文化的景観』とセットになって刊行されます。この両方の公表に向けてご尽力いただいた、執筆者および関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。（坂江渉）

## ひょうご歴史研究室紀要 第一〇号

令和七年（二〇二五）三月一日発行

編集・発行

兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室

（編集担当・坂江渉、長澤喜史、福永明子）

〒六七〇〇〇三 兵庫県姫路市本町六八番地

電話 〇七九・二八八・九〇一一

HP: <https://rekihaku.pref.hyogo.jp/lab/>

印

刷

合名会社 柳生印刷所

〒六七一・一五六一 兵庫県揖保郡太子町鶴五六八  
電話 〇七九・二七六・〇〇四八